

# 是彼會員

## 折り紙自販機

中川啓造（會員）



制作者である岡野千鶴さんと折り紙自販機

真夏の炎天下、汗がしたたる中ものともせず自転車を短い足で必死にこいで山道を走って行きました。

目的地にある折り紙の自販機までは歩くと1時間弱、自転車ならば20分程の距離ということなのですが、初めての土地の上、道案内となるナビも無い中、自分のカんと地元民に尋ねながらの目的地捜しでした。

当日は、午後2時内子発の高松行きJR切符を手配しており、自転車は2時間のレンタルなので非常に限られた条件下での行動でした。30分ぐらいしてやっと目的地を見つけ、目指す折り紙自販機が目に見え込んできた時には正直ホッとしました。場所は付近には畑が点々と広

がり、持主は岡野商店さんという田舎の雑貨屋で、ネットで見た折り紙自販機が店先にポツンと立っていました。

早速店内に飛び込み、主人公の岡野千鶴さんにお話をうかがいました。

2008年、成人識別カード「taspo」（タスポ）導入が転機となり、タバコ自動販売機を買い換えねばならなくなり、買い換えても採算が合いそうにないの自販機を撤去しよう、と考えていた矢先です。

すると家の前にある散髪屋さんから提案があり、「タバコの代わりに岡野さんが得意である折り紙を入れたらどうだ」ということがキッカケでした。彼女は以前、衰退する内子名

産の手すき和紙に歯止めをかけるため和紙創作展に年2回出展されており、その技術を活かしたら、ということでした。

和紙はコストが高くつき、また子どもに手の届く範囲内で買ってもらうため、パートの包装紙やチラシを利用して試行錯誤を重ねながらここまで来た、という経過でした。

品物は3種類あり、制作する手間に応じて10円、30円、50円と分かれております。

10円としては、紙ヒコーキ、手裏剣、紙風船など6種類が自販機が一番下に横に並べてあり、一番力を入れておられる30円モノは、6種類一番上に横向きに並べてあり、2か月に一度その季節に応じたテーマ性のあるモノを制作し、1月は正月、3月はおひな様と続き、7月は七夕で彦星と織姫でした。真ん中の段は50円モノで一番手間がかかるモノ、「ピョンピョン動くカエル」「くちばしがパクパク動くカラス」「バオーと鼻が動くゾウ」

など5種類横に並んでいます。そして、お金を入れると出てくる折り紙はこれも手作りのケースに入っています。

僕はあつかましくも岡野さんの工房に入れていただき展示品以外のモノも見せていただき、いろいろとお話を聞かせていただきました。

当初買いに来るのは、地元の子どもで手裏剣を主体にした10円モノで売れてもせいぜい1日2〜3個。それがマスコミによって知れ渡った結果、大人の方が多くなったそうです。

小一時間程お話を聞いた印象は非常に謙虚な方で、取材に見える方のために冷房のみのエアコン工事を当日設置された、優しい気配りのできる方でした。普通のおばちゃんの手一つでお金もほとんどかけず折り紙を通じて人に喜ばれる様は、正に「一隅を照らす」ということに他ならぬと感じ、帰り道では「ほっこり」とした気持ちになりました。

合掌